

1	導入・講義
2	講義
3	グループワーク
4	グループワーク
5	グループワーク
6	グループワーク：発表
7	学外演習
8	グループワーク：交流
9	講義
10	学外演習
11	グループワーク
12	グループワーク
13	グループワーク
14	グループワーク：発表
15	まとめ

図2 機能看護学概論の進行

マネジメントすることとはどういうことかを検討することから始め、これが看護専門職にとってはどうかという視点へ発展し理解されるよう意図した。グループワークの進行はグループメンバーと相談して決定した。

毎授業後には学習評価および授業検討の素材とするためにミニレポートの提出を義務付け、加えて、グループワークの評価についてワークでの発言や事前準備、資料作成などワーク進行への貢献状況が毎回記載できる記録用紙（貢献表）を作成し学生に説明して記述を求めた。

II. 具体的な授業進行

1. 導入と講義（第1・2回）

第1回および2回は看護学への導入を目的とした講義を行った。テーマはそれぞれ「教養教育の意義」「学問としての看護学」である。これらの主な内容は、何をすべきでまた何をすべきでないか、また物事の本質を判断していくために教養が必要であること、および学問では講義や文献から得た知識を批判的に受け止め根拠を探索していくことが重要であるというものである。これらはセルフマネジメントを学ぶ意義と方法とを示唆するものとなっている。

また、第1回には教養について各教員がそれぞれ意見を述べ、第2回には提示された研究データに対し各教員が解釈を述べるというティームティーチングを活かした方法をとった。その他、第2回には第1回のミニレポートに記載された質問を整理し配布し回答を述べた。これらのことは、学生から、「先生は自分では思いつかなかっ

た点に注目していた。」「もっといろいろな所に気づけるようになりたい。」「様々な意見が聞け参考になった。」

「先生が自分たちと同じように発言するのがうれしかった。」「まったく未知のキーワードについてのグループワークが楽しみである。」「これからは問をもちながら学んでいきたい。」「授業を活性化する質問を出していきたい。」という反応を得た。学生にとって自分の意見が授業で取り上げられることは喜びを伴う体験となり、主体的に参加しようとする意欲をもたらしと考えた。また、教員がそれぞれ異なる意見を述べたことは、唯一の正しい知識があるとは限らず、異なる意見の共存が可能であり、本科目では独自の意見を表現することが歓迎されることを伝えることとなった。これらは、グループワークで活発な討議を可能とする基盤作りという点でも導入の意味を果たしたと考える。

2. グループワーク開始から中間発表、第1回学外演習（第3～7回）

グループワークは第3回より開始した。グルーピングは学生に関心のあるキーワードをたずねこれをもとに行った。結果として7つのキーワードのうち価値観を希望した者が多く、一方自治を希望する者が少なかったため、価値観について2グループを設け、自治は自律と合わせて自治・自律グループとし、全7グループとなった。メンバー数は11または12名であった。

グループワークの進行は各グループにまかせることとした。このため開始の方法もいろいろであり、例として、Aグループでは、セルフマネジメントとすることについて具体例を提示するという課題から開始した。一方、Bグループでは、担当キーワードについて直接“これは何か”を検討することから開始された。その後のワーク内容は学生の問題意識にしたがって決定していき、例えばCグループでは文献を用いてセルフマネジメントの実践例を紹介しあい、その中からキーワードとセルフマネジメントとの関連を見出していったが、Dグループでは直接キーワードについての情報収集へと進んでいった。

3回のワークが終了した時点で中間発表を行った。これは、担当以外のキーワードに関心を向けることで、セルフマネジメントを多側面から考察できるようにと考えた企画である。またこの時点でいったん経過を整理し、

表1 中間発表で示された検討内容

グループ キーワード	検討内容
価値観1	様々な価値観の例を文芸書やノンフィクションから紹介し、検討課題として、価値観が、①価値観はどこから生まれ何に影響されるのか、②価値観をどのように理解するか、③価値観とセルフマネジメントの関係はどのようなものかを提示した。
価値観2	臓器移植、人身売買、極限状況における医療行為などの事例を紹介し、初めは価値観はひとそれぞれ異なっていってよいと考えていたが、すべての人に共通した価値観が存在するのではないかと考えるようになり、それは命であるという考えを提示した。
人間観	人間観の定義や「人間とは」についての検討結果を提示した上で、議論の手がかりとして、・人間観は何にどのように影響するのか、・看護婦として必要な人間観とは、・人間の魅力とは何か他全7テーマを設定し検討していることを示した。
健康観	健康には精神的、心理的、社会的側面があること、健康とは何かということとは個々の健康の度合いや目線によって異なることを説明した。
意思決定	意思決定を定義づけるため身近な出来事を具体例として収集し、①意思決定は無意識になされることもある、②では意思決定に影響を与えるものには何があるのか、③その一因として年齢を取り上げ、成長に伴って意思決定がどう変化していくのかについてなされた議論経過を提示した。
責任	責任と責務および義務の違いについて、学生を対象とした意見調査結果を整理し考察した。また、責任が成長に伴って身につけていくべきか、および、医療事故例を通して考えた責任の意味について提示した。
自治・自律	自治と自律および自立の相違を検討し、パラサイトシングル現象を事例として用い理解をはかった経緯を報告した。また課題として学外演習を通して、①人に頼ることと自律、②人が自律しようとするのはなぜか、③自律と自立の相違、を検討していくことを提示した。

他グループと比較することで、自分たちの進行程度を客観的にみつめ軌道を点検する機会となることも考えた。

中間発表での各グループの強調点は様々であったが(表1)、それぞれ検討プロセスがよく表現された。中間発表後の学生の反応からは、「ぐるぐるまわってしまっ、まとめが出せなかった。」「自分たちの発表は漠然としていて具体的なテーマが必要だと思った。」のように難しさを覚えながらも、「もっと広い視野で物事をみていきたい。」とグループワークに対する前向きな意欲が見受けられた。

中間発表後にグループ間での交流の機会(以下、交流ワーク)を設定した。発表を聞いただけでは他のグループのキーワードを理解することは困難であり、さらに自分のキーワードや検討プロセスと比較して示唆を得るまでは至らず、したがって、つづくグループワークに貢献するところが少ないと考えたためである。このため、自分のキーワードの視点から疑問を提起しディスカッションできる機会として計画した。当初この交流ワークは質問のあるグループが他グループを訪問し回答を得てくるという発想であった。しかし、教員間で検討を重ねるうちに、発表内容について質問応答をするという方法では、有効なディスカッションは起こらないのではないかと思

い至った。そこで、キーワードに関連したテーマを設定し、各グループから代表者が集まって、それまでの検討によって培った知識や考えを提示しながら、ディスカッションを行う方法を試みることにした。このため、中間発表を聞いた上で交流したいグループや意見交換したい内容および時期について希望の提示を求めた。しかし、グループごとに検討内容と進行状況が異なり調整が困難な結果となったので、学生の希望を参考に担当教員が交流ワークテーマを設定し、学外演習の翌週を全グループ一斉の交流ワークとした。

一方、交流ワークが学外演習の翌週にあたるため、グループワークと学外演習とを効果的に結びつけたいと考えた。そこで、学外演習で機能看護学講座が担当する現場へ割り振られている学生について、キーワードを念頭において看護現場を観察するという課題を提示し、指定発言者として特定の交流ワークグループに加わり、演習体験を交流ワークテーマの視点から発表することとした。

3. 交流ワークから講義一看護専門職の理解(第8・9回)

交流ワークは、交流ワークグループそれぞれに指定発言者による演習体験の発表から開始した。異なるキー

表2 交流ワークでの検討内容

交流テーマ	検討内容
健康観と価値観	病気だから不健康というのではなく、今の自分が健康と思うかどうかは、その人の価値観による。また、健康状態によって価値観は変わる。看護婦の立場ならではの健康観というのものもある。
自治・自律における意思決定	乳幼児のように自律の途にある対象では専門家が代わって意思決定する場合がある。意思決定には自律し適切な価値観をもつことが重要である。自律を促す看護の役割は、意思決定を支援するものである。
人間観と価値観	脳死患者に対する関わりについて、患者に人としてどのような役割を認めていくかは人間観である。障害のある子、痴呆の高齢者を家族が引き取るかどうかは、価値観によるが時間やお金など他にも影響するものは多い。「普通」ということにとらわれている場合がある。
命より大切なものはあるか？	自殺をする人もその理由や自殺に至った状況は様々であり、命そのものが大切かどうかの問題ではない。生き生きとしていることや、生かされるのではなく生きることが命。命が大切でない例を探していく必要がある。
意思決定と価値観	意思決定は価値観によって左右される。個人と集団とでは意思決定の困難さが異なる。その人自身が意思決定できない場合、代わって行うのは難しい。専門家の価値観と家族の価値観を両立させて意思決定するのは難しい。
意思決定と責任	価値観に基づいて意思決定はなされ、そこから責任が生じる。赤ちゃんの意思決定は親や看護婦が代わって行い従って責任も親や看護婦にある。意思決定した結果だけに責任があるのではなく、その過程や理由にも責任がある。
責任と価値観	何が看護婦の責任であると思うか、また感じる責任の大きさは価値観によって異なる。職種によって価値観が異なるが責任は同じ。立場が違っても価値観が同じでも責任は異なる。
行為は何に影響されるか	行為には、周囲との関係や、本能、体験、価値観、責任感、人間観が関わる。行為自体のもつ価値と責任に影響される。対象の価値観をもとに判断し責任をもって行為するのが看護。

ワードについて行ってきた検討を、学外演習での体験を材料として共有するという盛りだくさんすぎるように思われる試みに、学生は積極的に取り組んだ（表2）。交流ワーク後の学生のミニレポートには担当外のキーワードに関する学びや、「少しずつキーワードがつながってきた」「一方からではなく他方からの考えも少しわかった。」「盛り上がったところで終わってしまい時間が短かった。」というもの、「1つ1つがもっともな意見だけれどごちゃごちゃになった」「自分のキーワードの話につなげられず困った。キーワードを幅広く捕らえておくことが必要だと思った。」という記載などがあり、いずれも新たな検討の視点を得て、複数のキーワードに関連づけて理解していこうとする取り組みを示していると考えた。

交流ワークの翌週は「看護専門職の理解」をテーマとする講義を実施し、専門職としての看護にとってセルフマネジメントがどのような意味をもつのかを考える機会とした。この時期に設定したのは、学外演習の体験から学生なりに専門職についてイメージするものがあると考えたこと、講義後に第2回学外演習が実施されることと

なるので知識が新たな観察視点となり批判的な吟味を導くのではないかと考えたこと、そして、この後グループワークが3回実施できるので、講義をワークに生かす時間的余裕があると判断されたことが理由である。

講義では、専門職および看護専門職についての解説と看護事例を提示しこれを検討する演習を行った。事例は、手術を受けるか否か意思決定に悩む患者に対する2人の異なる意見をもつ看護婦についてのもので、学生に2人の看護婦の態度を専門職としての視点から検討することを求めた。さらに各教員が体験を交えた専門職についての意見を提示した。講義後のミニレポートには「どちらの看護婦も正しいが人間観が違っているように思う。」「同じ看護婦でも価値観によって意思決定が異なる。」「難しかった。専門職の責任について考えたい。」というように、講義内容をキーワードの視点から理解しようとする意図が見られた。

4. 第2回学外演習から最終発表（第10～15回）

翌週に行われた第2回学外演習については共通した課題を提示することはしなかった。しかし、最終発表が近づいており、まとめに向かってグループごとに学生自身

表3 最終発表で示された検討内容

グループ キーワード	検討内容
価値観1	学外演習で出会った抑制場面を通して価値観や価値観を自覚することが行動に及ぼす影響を検討し、これよりセルフマネジメントとは何かを考察した。セルフマネジメントとは価値観を自覚したうえで考えていくことであるとした。
価値観2	価値観の定義を示し、根本的価値観が合ってその上に個性に値する価値観があることを図示した。さらに、職業的規範と価値観という視点から、7つのキーワードを構造化し、この総体がセルフマネジメントであるとした。
人間観	人間観とは人間の見方という価値観であるとしたうえで、学外演習事例、講義で用いた事例に表現されている人間観や、偏見、生命の尊厳という視点から考えた人間観を説明した。セルフマネジメントとは、他の看護婦と話し合い価値観を広げていくこと、少しでもいいから自分を変えていくこととした。
健康観	健康の定義、理論・モデル、自覚調査などから、健康か不健康かは自分で決めるものであること、健康は主観的客観的に評価することができることを説明した。セルフマネジメントとは自分がどうしたいか理解でき、それに向かって努力し、自分をつくりあげることとした。
意思決定	意思決定の検討から7つのキーワードの関連を整理し、個人や集団は相互に作用する価値観、人間観、健康観をもってこれに対し責任を負っていること、意思決定はこれらを通してなされ行動となるが、その際、すべてのキーワードを総合して意思決定することが自治であり自律であるとした。セルフマネジメントは看護職として生涯にわたり自分の能力を開発発展させていくことであるとした。
責任	看護職者としての責任について事例を用いて検討した過程を説明し、さらに、責任と他のキーワードとの関連を検討し、人の判断・行動は価値観・人間観・健康観に基づいてなされ、これに意思決定・責任・自治・自律が影響を与え合うものとした。また、セルフマネジメントとは自分で考えて行うことであると提示した。
自治・自律	専門職における自律と自治とを検討しながら、自律が統合されると自治となると結論づけた。さらに、他のキーワードとの関連からも自治・自律について理解をはかり、これらは関連しつながらあっているとした。セルフマネジメントは物事の良し悪しを考えて立ち止まることであり、それをもとに進むのが自律であるとした。

が課題を提案した。たとえば、Eグループでは、現場で実践されている看護行為にキーワードがどう影響しているか、これにより生じている問題や葛藤を観察してくることとなった。

つづく3回のワークでは、中間発表や学外演習、交流ワークを通して得た討論の視点をグループへ持ちかえり、これを活用しながら学びを深める方向に議論を進めていった。グループの中には、セルフマネジメントとは何かをすべてのキーワードに関連付け構造化して説明しようとしたグループが複数あった。一方、学外演習の体験を共有するなかから、キーワードの理解につながる新たな課題を見出して、果敢に取り組んでいるグループもあった。例えば、Fグループでは、危険行動をとる患者が抑制されていた場面が紹介され、抑制に対する看護婦の態度を検討することで、キーワードとセルフマネジメントの理解を深めようとした。このようにグループによってまとめに至る方法は異なったが、このことは、自分なりに結論づけるため意見を多角的に検討する姿勢の現れであると捉え、発表に向かった。

これらの成果が、第14回に発表された。どのグループ

もキーワードの意味を説明するのに事例を用いていた。また、セルフマネジメントについてキーワードの視点から構築を試みていた(表3)。発表に対しては「7つのキーワードを聞いて、もう一度自分の考えを吟味したいと思った。」「一番最初に考えていたキーワードの意味と、7つ全部聞いてからのとは違うものだった。」「視点が違えばいろいろなセルフマネジメントの理解がある。」「グループが違ってもキーワードの関連についての考え方が似ていてびっくりした。」という感想があった。異なるキーワードであっても発表をよく理解し取り込んでいることがうかがえた。

講義最終回は、担当教員のコメントと質問への回答のための時間とした。また最終回には、事前に課題を提示しておいたレポートの提出を求めた。この最終レポートの課題は、任意の事例を示しそれを用いて7つのキーワードの看護における意味を考察すること、看護におけるセルフマネジメントの意義を述べるというものであった。事例は学生が自由に提示してよいこととしてあったが、77名中52名が、学外演習での体験をキーワード考察のための事例として用いていた。

Ⅲ. 授業を振り返って

セルフマネジメントを主題とする機能看護学概論授業を振り返り、本授業方法による学びと今後の課題を整理したい。

1) セルフマネジメントの学習方法として

(1) グループワーク

本科目が主として採用したグループワークは、7つのキーワードやセルフマネジメントという抽象的な概念を、能動的に学ぶことを促進したと考える。難解な概念が講義によって提示された場合、受動的で表面的な理解にとどまり、したがって定着しにくい³⁾。しかし、グループワークでは概念解釈の困難さに対抗するために多くのアイデアが必要とされるので、メンバーは意見を表現し説明せざるをえない状況におかれる。考えを説明しようとする活動は自分が知っていることと知らないこととを自覚させ、自分が何を学ぶ必要があるかという気づきをもたらす⁴⁾。同時に、自分なりに意見を持ちディスカッションを行う意義が体験され、参加することで学ぶという主体的な態度の促進に貢献したと考える。

また、中間発表や他グループと共通したテーマを検討しあう交流ワークは、グループ内では共有されていたキーワードの解釈を、まだ理解しない他者に対し説明する機会となり⁵⁾、グループ内で浅いレベルで収束しようとするワークを刺激し、新たな課題を提供する効果があったと考える。

(2) 学外演習の取り組み

本授業では、学外演習との関連付けを重要視し、事前課題の提示と体験の教材化をはかった。学外演習の事例は同じレディネスをもつクラスメートの体験であり、いきいきとした描写と感動を伴って提示されるので興味を持って受け止められやすい。また、学生の関心に応じて細部まで掘り起こすことができる。このため、討論の具体化活性化をもたらし、効果的な教材であったと考える。

また、学生は第2回の学外演習に自発的に課題を設定して臨んだ。そして、そこで得られた体験をグループで、またレポート作成の機会には個人で何度も振り返り、最終的にセルフマネジメントのテーマのもとに整理をした。このような過程で得られた学びは、体験から実感を伴って取り出されたゆえに枠組みとして深く根付き、今後引き継がれていくもの⁶⁾と考える。

このようにグループワークに学外演習を取り込んだことはセルフマネジメントの学びを促進すると同時に、学外演習の意義もまた高めたといえるだろう。

(3) 共に学ぶ姿勢とチームティーチング

本科目では学生とともに学ぶ姿勢での支援を重要視すると同時に、形式としてチームティーチングを採用した。批判的な思考を学ぶ際、教員-学生間の共に学ぶ関係が有効であることが指摘されており⁷⁾、本方法が学生とともに問題を発見し、解決のための資源を探索する真のディスカッション⁸⁾をもたらすことに貢献したと考える。また、チームティーチングによって教員が事前の授業目的や進行の慎重な検討をし、これに基づいてそれぞれの得意分野からの見方で意見を述べたことも、学生が様々な意見の存在とその価値に気づく機会となり、間接的にディスカッションを促進することとなったと考える。

一方、チームティーチングはキーワードを道標としてセルフマネジメントを学ぶ方法に不可欠であったと考える。つまり、7つのキーワードはそれぞれ観念、態度と強く結びついた行為や状態、概念というように、異なる性質をもっている。また、学生がもともとそのキーワードにどの程度なじんでいたかということや、理解を促すのに適切と思われる文献・事例が異なり、この違いがそのままキーワードを理解しようとする際に学生が感じる困難さの違いとなったと思われる。このようにグループにより必然的に進行が異なるワークの支援は、チームティーチングだからこそ可能なことであったと考える。

(4) 本授業方法の意義

学生が結論づけたように、セルフマネジメントは、自らの考えや価値観を認識することから開始される。今回のワークは、ディスカッションの中から自分の考えや価値観に気づき、これを多様な資源から知識を用いて吟味し結論づけていくセルフマネジメントの過程そのものであり、セルフマネジメントを学ぶ方法として妥当なものであったと考える。また、学生がこれまで受けてきた教育システムにおいては、知識は固定されたものとして認識されやすく⁹⁾、批判的に吟味する経験は少ない。したがって、本科目で採用した種々の方法は、抽象度の高い概念を吟味しながら理解する方法を会得するものとしても意義があり、1セメスタ開講科目として、また、つづ

く方法論の基礎として有意義なものとする。

2) 今後の課題

本科目では、学生が文献や講義で得た知識をそのまま鵜呑みにするのではなく、多角的に吟味し理解したところを自分の言葉で表現することを重視している。最終発表やレポートからは、個々の学生がキーワードとセルフマネジメントについて自分なりに理解し何らかの結論に至ったことがうかがわれた。しかし、学生のミニレポートや教員の感想からは、グループワークがキーワードの理解から開始されたために、セルフマネジメントについては十分に検討するまでは至らなかったという指摘があった。このことから、学生が科目の主題であるセルフマネジメントについて、これが今後の学習の芯となるまでに理解されたとはいえない。

本科目では、全担当教員が採点のためにレポートを評価したが、内容を分析的に検討することはしていない。このため、結果としてセルフマネジメントがいかに理解されたかは整理されていない。グループワークの進行は原則として学生の問題意識にそうように考えられていたが、概念理解の前提としてその定義をどう考慮するかは共通したポイントであったかもしれない。教員の関わり方がワークの進行を十分に促進できていたかを振り返らなくてはならない。

また、学生の主体的参画を意図してグループワークに重きをおいたため、講義にあてる時間は限られたものとなった。講義形式の授業が主体的な関心をもたらすかどうかについては様々な意見があるが¹⁰⁻¹³⁾、講義は知識の枠組みを伝えるのに最適な方法という指摘もある¹⁴⁾。本科目では全15回中3回の講義を行い、内2回は開始時点に実施した。本科目で展開した教授—学習スタイルが学生の学びを支援する最も効果的なバランスであったか、講義内容がその後の学びに与えた影響も考慮し検討していく必要があると考える。

おわりに

以上、機能看護学概論を振り返り、特に授業方法に注目してその意義と課題の整理を試みた。本科目が開講されて2年がたち、今新たな課題が見出されている。セルフマネジメントについての学びが、4年間を通じた機能看護学の芯としてあるよう、真摯にこの課題に取り組んでいきたい。

文献

- 1) 池西悦子, 宮本千津子, 奥井幸子他: キーワードを活用した授業による学びの分析—セルフマネジメント能力の育成を目指して—, 岐阜県立看護大学紀要, 1 (1); 66-72, 2001.
- 2) 文部省編集: わが国の文教施策 (平成11年度), 大蔵省印刷局; 9, 1999.
- 3) D. A. プライ: What's the Use of Lectures?, 1971, 山口栄一訳, 大学の講義法, 玉川大学出版部; 252, 1985.
- 4) 多鹿秀継編著: 認知心理学者からみた授業過程の理解, 北大路書房; 116-117, 1999.
- 5) 前掲4); 117.
- 6) 前掲1); 71.
- 7) D. M. Billings and J. A. Halstead: Teaching in Nursing, W. B. Saunders Company, 249, 1998.
- 8) J. ロジャーズ: Adults Learning (3rd Edition), 1989, 藤岡英夫監訳, おとなを教える, 学文社; 246, 1997.
- 9) 田中一: さよならふるい講義, 北海道大学図書刊行会; 103, 1999.
- 10) 前掲3); 17.
- 11) 前掲8); 168.
- 12) 前掲7); 153.
- 13) S. G. クランツ: How to Teach Mathematics, 1993, 蓮井敏訳, 大学授業の心得, 玉川大学出版部; 41, 1998.
- 14) 前掲9); 10.

(受稿日 平成14年2月12日)